

福井県文書館講演

## 真田信繁と大谷吉継、そして越前松平家

黒田 基樹\*

はじめに

1. 戦国真田家とは
2. 真田信繁の実像

はじめに

みなさん、こんにちは。ただいまご紹介いただきました、駿河台大学に勤めております、黒田と申します。今日は短い時間ですが、よろしく申し上げます。今日、福井でお話をさせていただくわけですが、私は先ほどご紹介いただいたように、関東の戦国時代を中心に研究をしまして、25年くらい前から福井の越前松平文庫とか越葵文庫とかをよく調査に来ていました。越前松平家というのは関東の結城家を継いだ家として、多くの関東の武士が仕えていて、その関係の古文書を探しに福井までよく来ていたのですけれども、そういったところでお話をさせていただくということに関して、大変光栄に思っています。

今回の講演は、大河ドラマ「真田丸」にちなんでということで、私は時代考証を担当させていただいています。実はこの真田家についての研究というのは、30年前に「真田太平記」というのがNHKであったのですが、その時以来、ほとんど進んでいないというのが現状です。戦国大名とか豊臣時代の武将についての本格的な研究というのは、進んでいるところはごく一部であります。例えば大谷吉継の本格的な研究は本当にここ数年です。敦賀市立博物館の外岡慎一郎さんがされている以外はなく、今年の研究紀要で吉継の生涯というのがあげられていましたけれども、それ以前はほとんどないです。真田家についてもそうで、30年前に少し一般書が出たのですが、それ以降は研究というのはほとんど進んでいません。一部、上田の方とかで徐々に研究が進んでいたのですが、それをまとめたような本というのは出ていないです。今回「真田丸」が大河ドラマになるということで、多くの本が去年から出されてきたと思いますが、その中で、きちっと史料まであたって書かれている本というのは、時代考証をしている3人の本だけです。私とあともう2人、それぞれ3冊ずつくらい出しています。

大谷吉継に戻りますが、大谷吉継についてはよくわかりません。史料が非常に少ないということと、やはり豊臣時代の史料というのはほとんどまだ史料集に載ってない状況なのですね。だいたい歴史の史料集というのは自治体史とかたちで、ここですと『福井県史』とかたちでまとめられる場合があります。福井の場合は先見性があったのか、中・近世編という資料編を作っているのですが、

---

\*駿河台大学法学部教授、NHK大河ドラマ「真田丸」時代考証担当

それ以外の自治体は中世編と近世編に分けています。そうすると、いつからいつまでが中世か、いつからが近世か、というようになるのですが、大体、織田信長が出てきたくらいで近世だ、というようになってしまったんですね。それまでの戦国大名の時代までが中世編に入りますが、近世編というのは幕末までですから、全ての時代は入りません。すると、織田時代、豊臣時代、徳川時代の初期がほとんど落ちてしまうという状況で、一番、活字化率が低いといいますが、遅れているのが豊臣時代です。たまたま『福井県史』に関しては、福井に残っているものはかなり入っているのですが、福井の外にあるものに関してはほとんどとることができていないです。そういったところでも、例えば大谷吉継の史料が全部まとめて見られるかということ、そういう状況は今ありません。ですから、史料を集めてきちっとその生涯を確定するという作業が今進められているということで、吉継に関しては先ほどお名前を出しましたがけれども、敦賀の外岡さんが一生懸命されているという状況です。

では、その後、越前に入ってきた松平秀康とか忠直がどうなのかということです。秀康に関しては20年前に史料を集めて論文を書きました。その時にも福井の図書館に何回か通いました。秀康や忠直について、どういう政治的な立場だったか。その時の徳川一門の中では最大の領地高ですし、場所が越前ということですので、政治的な地位は非常に高いです。その政治的な地位の高さがきちっと評価されているかということ、やはり尾張や紀伊の方が有名です。それ以前、尾張や紀伊が出てくるまでの越前松平家の秀康、忠直は相当すごい存在でした。徳川政権が成立して、大坂の陣、その後江戸幕府の覇権が確立する過程の中でどういう政治的なポジションになっていたかというのは、まだ明らかになっていないと思います。昨日、福井に来たのですが、車で恐竜が出迎えをしてくれましたけれど、私としては秀康か忠直だとうれしかったので、ぜひぜひ、秀康、忠直あたりの研究というのがどんどん進むことを期待したいと思っています。

### 1. 戦国真田家とは

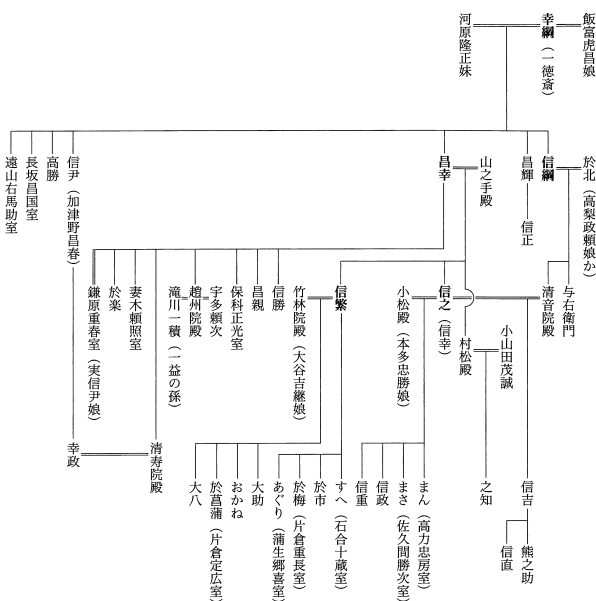


図1 「真田信之関係系図」  
(拙著『真田信之』P16、2017年より)

今日は「真田丸」にちなんで、越前との関係を中心に話をさせていただきます。主人公、真田信繁ですが、これはほとんど史料がありません。最期、大坂の陣で活躍して有名になっただけでそれまで具体的に何をしていたかわかっていることは、多分10本の指くらいで数えられてしまうほど実績が少ないです。これについては後でお話ししますが、その真田家というのはどういう存在なのかということを最初にお話ししたいと思います。そもそも真田家がどういう存在なのか。今回ドラマになって大分認識されるようになったと思いますが、やはり、関東以外、甲信地方以外の所ではよくご存知ない方が多いと思いますので、簡単に話をしていきたいと思っています。

真田家自体の動向がわかるのは信繁の祖父の幸綱からです（図1）。それ以前はほとんどわかりません。幸綱がいて、父親の昌幸の代、その前に信綱というのが二代目にいるのですが、信綱が途中で戦死してしまうので、弟の昌幸が家督を継ぐという状況になります。それまではほとんど、存在はしていたのですが、具体的な動向というのは史料に出てこない存在になります。

次に、資料（図2）をご覧ください。東北の片隅の部分<sup>くにしゅう</sup>が真田家の最初の領地ということになります。非常に小さな存在になります。

初代が幸綱で、2代目が信綱で、3代目が昌幸、4代目が信之ということになります。ドラマの主人公の信繁は真田家の当主ではなくて、庶子、昌幸の次男ということになります。

次に、真田家の存在について、真田家は当初、「国衆」という存在で、今回のドラマでも真田家のような存在を国衆という言葉で表現していますが、これはドラマとしては初めてです。大河ドラマ以前にもNHKの歴史番組に何回か出てはいますが、その時に国衆という言葉は使えなかったのです。今回の大河ドラマでは制作側が現在の最新の研究成果を反映したいということで国衆という言葉を使うようになりました。実はその国衆という言葉を使うようになったのは私で、25年くらい前からそういう存在を国衆と表現していて、研究の世界では一般化してきたものになり、それがドラマの世界でも採用されたということになります。

戦国時代にある一定領域を独立的に支配する領域権力、領主権力、これを国衆とっています。ただ、単独で存立することはできないので、どこかの戦国大名の配下に入って軍事的な保護を受けるという関係ですね。ドラマの中の真田もそうですし、その他木曾とか穴山とか小山田とか室賀とかも出てきたと思いますが、みな国衆なのです。小さな独立国家を営んでいて、その上で強大な戦国大名に仕え、その保護の下で存立を果たしていく、そういう存在を国衆といいます。今回は真田目線で戦国の戦乱を描くということで、昌幸がどの大名にくつつくのか、というところを描いています。逆に、その真田を従えるような上杉とか北条とか徳川というのが、真田の動向に振り回されています。そういうような描き方がされていたと思いますが、要するに戦国大名の勢力というのはそうした国衆をどれだけ味方にしていくかということで拡大したり、あるいは、裏切られることで縮小していったり、そういう国衆の取り合いみたいな状況が大名同士の戦争の内実であります。それを今回は国衆である真田目線で描くことで、大名が振り回されているような感じが表現できているというものになっていると思います。

その真田領の国衆から出発した真田家は、武田家に仕えてそのもとで台頭をしていくことになりま

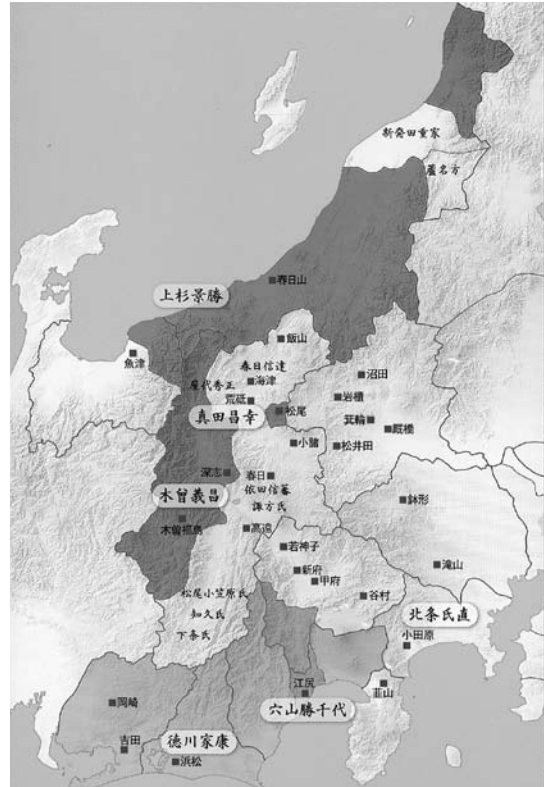


図2 「天正10年6月 本能寺の変翌日の勢力図」  
(丸島和洋『図説真田一族』P60、2015年より)

す。昌幸はもともと人質に出されていて、人質から成人した後は武田信玄の側近家臣に取り立てられて譜代家臣化するのです。それで、譜代家臣化した後に兄が死んでしまったので、本家の国衆を継ぐという非常に特異な立場であります。ですから昌幸はももとは武田の譜代家臣というところから出発して実家の国衆を継いだということで二つの側面を併せ持つ、珍しい存在になります。ドラマを見られて覚えておられるかどうか、武田勝頼の前で軍議が開かれていたと思いますが、普通は国衆だったらあの席にはいられないのです。あの席は譜代家臣がいるところなのですが、真田は昌幸自身が譜代家臣なのであの席にいたことができたのです。昌幸がそういう立場だったからよかったものの、今までのドラマの作り方からすると、昌幸がもし譜代の宿老、家老の立場になかったとしてもドラマとしては入れてしまうかもしれないです。今回のドラマでいうと昌幸が家老になっていたので、そこにも違和感がありません。しっかりと裏付けがとれた設定になっているということになります。

ところが武田家が天正10年（1582）に滅亡してしまいます。ドラマはそれ以降の展開になりますが、北にいる上杉、南東の北条、南西の徳川、この三大名に囲まれている中で自身の領国を拡大し、維持していくということが描かれてきました（図3）。最終的には天下人になった羽柴秀吉に直属に従属することでその立場を確保するということにはなりますが、先ほど見ていただいた最初の領地からすると、相当大きくなっていることがわかると思います。これも、三大名に囲まれていたから可能だったというような、偶然性の結果になると思いますが、その偶然性を活かすことができたということで、昌幸は知将といわれていると思います。次に、私が一番注目しているエピソードを紹介します。

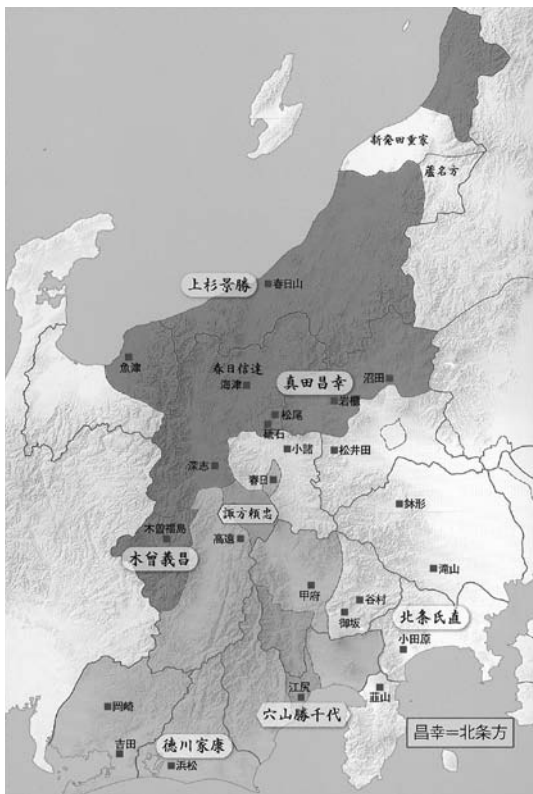


図3 「天正10年7月初旬頃の勢力図」  
 (丸島和洋『図説真田一族』P61、2015年より)

天正11年、昌幸自体は徳川に従って、北条、上杉と対抗関係にある中で、沼田領が北条から攻められた時に昌幸は沼田城代に矢沢頼綱を任命します。これはドラマで叔父となっています。近世真田家では叔父と伝承しているのですが、私は実体は違うだろうと思っています。それはともかくとして、その頼綱が沼田城代に赴任するのです。そうすると頼綱が何をするかというと、そのまま上杉に従属するのです。普通はそういう状況の時というのは頼綱は昌幸を裏切って上杉に従属したということになるのですが、その後も昌幸と頼綱は関係を持っています。要するに昌幸は信濃では上杉と対抗しているのですが、上野では上杉方になるという非常にわけがわからない状態なのです。上杉景勝も当時わけがわからなかったらしくて矢沢頼綱が従属したいと言っているということを開東の味方の勢力に、こんなことを言っているのだけど信じられるかと聞いているのです。その時関東では北条が反北条勢力を圧迫し

ていたので、一人でも味方が欲しいということで、信用できるのではないですかと景勝に言って、景勝は信用して矢沢の服属を認めるのです。そうすると矢沢のバックには上杉がついてくるので北条は簡単に沼田領に侵攻できなかった、そういう手を使いました。信濃では昌幸が上杉方の城を攻撃しているわけです。当時の人もわけがわからなかったと思いますし、ドラマの中でもわけがわからないということができてきたと思いますが、本当にそういう複雑怪奇な状況にあって、それをくぐりぬけて展開していったのが真田の動向ということになります。

最終的に、天正18年の小田原合戦の結果、独立大名になります。当時の言葉としては「小名」で、学術的には独立した領域権力を大名とっていますので、豊臣時代の大名ということで「豊臣大名」と表現しています。秀吉政権のもとでその領地の大きさが確定されます。上田領が3万8000石、沼田領が2万7000石（図4）。次男の信繁は秀吉に人質に出された後に直臣にとりたてられて、昌幸から信繁に上田領の中から所領が多分与えられたのでしょね。名目的には秀吉が与えたという形で1万9000石の所領を与えられています。一族全体では8万4000石、信濃の上田領、小諸郡と上野の沼田領あわせて8万4000石というような所領高として確定されています。これが真田家が豊臣時代になるまでの状況です。国衆から独立した「豊臣大名」まで成長しました。信濃にそれまでいた国衆達というのは全部、実は家康の家臣にされてしまって関東に移るのですが、信濃の生え抜きの領主で信濃に残ることができたのは真田だけになります。それは秀吉の直属の大名である立場が認められたからということですね。

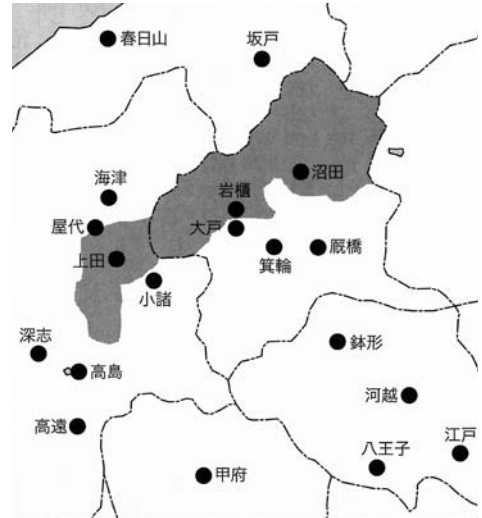


図4 「上田と沼田の領域図」  
 (丸島和洋氏作成の図を元に作成、拙著『真田信之』P97、2016年より)

## 2. 真田信繁の実像

次に、主人公の真田信繁の実像ということですが、真田信繁については先ほどもお話ししたように、30年前までの研究ではほとんど大坂の陣の動向しかわかっていませんでした。近世真田家にも記録があるのですが、少しずつしか出てこなくてほとんどが大坂の陣の話です。関ヶ原と大坂の陣ばかりということになります。ちょうど2年くらい前から「真田丸」の準備が始まって、我々時代考証は一から史料を集めて点検を始めました。ストーリーのための素材提供をしなければいけない。実はそういう中で新しい事実というのがいくつか発見されました。それが今回、いくつか反映されているところがあります。

まずは、生まれ年ですが、実は真田信繁は生まれ年ははっきりしていません。近世真田家で一番よく使われているのは永禄10年（1567）生まれです。今回のドラマでもその通説をとっています。これは兄の信之からすると一歳年少ということなのですが、これが通説としてあって、ドラマを準備する段階ではこの通説で出発しました。しかし、その後我々が検討していくと、この通説はちょっとおか

しいなということになりました。現在私は元亀3年(1572)生まれだろうと思っています。通説と比べると、6歳年少ということですね。大坂の陣で戦死した時には43歳。通説ですと49歳ということになるのですが、43歳くらいの年齢だったのではないかとと思っています。しかしそれも確定できているわけではないです。意外と有名人であっても何年生まれなのかわかっていないということが多いです。

信繁の存在が最初に確認されるのが、天正10年、天正壬午の乱での動向で、ドラマの中で滝川につかまって木曾に送られたという話があったと思いますが、これは確認された史実を取り入れたものになっています。信繁について最初に確認されるのは、滝川に人質に出されてその後木曾義昌に預けられていて木曾にいたという事実になります。それがわかったのが去年の3月くらいの話です。実はちょうどその頃の回を準備している時になります。脚本が出来てくる段階でその話がわかってそれを取り入れようと思って、時間的に無理かもしれないということだったのですが、三谷幸喜さんがその事実がおもしろいということでああいう形で作劇に取り込んだということになります。それまでにはわかっていなかった事実だったのです。それが木曾義昌のところに人質として置かれていたことがわかって、それをもとに作劇をしたことになります。次にわかるのが、3年後、真田家自体が上杉氏に従属した後、上杉家から所領を与えられていてその所領をさらに自分の家臣に与えていたという動向です。その後、上杉に対して人質として送られていることですね。ドラマでは時間が前後する作劇をしています。実際に上杉に人質として送られたことは間違いのないことになります。その後、これは推定ですけども、天正15年2月に真田昌幸が秀吉に従属をします。その時に人質として送られたことです。昌幸が秀吉に従属した時期も正月なのか2月なのか3月なのかで諸説があるのですが、これも検討していく中で2月が正しいということでドラマでも2月でいっております。

秀吉のもとに人質で送られた後、ドラマではすぐに御馬廻衆にとりたてられることになっているのですが、これは作劇上の都合になります。しかし、実際に信繁自体は御馬廻衆になっています。これも準備の過程でわかったことになります。具体的な事実としては文禄元年(1593)、これは文禄の役ですね。朝鮮出兵の段階で、秀吉自身が肥前の名護屋城に出馬しているのですが、そこで秀吉の馬廻衆として名護屋城の三ノ丸在番衆の中に「真田源次」という名前が見えます。これで信繁が馬廻衆で、秀吉の直臣であったということがわかったわけです。これをもとにドラマでは秀吉に人質として送られた直後に直臣としてとりたてられたという設定をしたというわけです。これも先ほどの例と同じなのですが、準備の段階で信繁を秀吉の側に置きたいとプロデューサーが言うのです。秀吉の時代ですから話の中心はどうしても秀吉になってしまいます。話の中心に主人公を置くというのは、今まで大河ドラマでやっていた常套手段です。江がなぜか清洲会議に出ていたり、黒田官兵衛とか山内一豊がいつも重要な会議に出ていたり、そんなのありえないのです。だけど主人公と話の中心をずらしてしまうとドラマとしてはつまらないといえますか、分散されてしまいます。典型的なのは、「八重の桜」の時の京都と会津の二元中継です。そういう状況は避けたいということで必ず主人公を話の中心に置きます。そういうわけで信繁も秀吉の側に置かなければならないといったときに、実は信繁は文禄期以降は秀吉の馬廻衆だったので、それ以降は堂々と秀吉の側にいますよと話しました。それを少し遡って作劇をしたということです。そういう設定をした後にネットかなにかで三谷さんに対して、そういうのは違反ではないか、直臣になるのはおかしいのではないか、というようなコメントが

ありました。それに対して三谷さんは、史実通りですよという答えをしていたということを知りました。そうした史実を提供できて、ドラマとしてのおもしろさと史実の裏付けの両方ができた一つの事例かなと思っています。

豊臣時代については、ほとんどよくわかっていないのですが、文禄3年の11月2日、秀吉の推挙によって従五位下・左衛門佐に叙任されます。ドラマでもとりあげたところになりますが、この従五位下とそれに相応する官職、これを兼ね備えた身分を諸大夫しよだいぶといひまして、これは朝廷に参内できる身分になります。秀吉の直臣は全部、諸大夫を与えられています。信繁も秀吉の直臣で、お兄さんの信之と同日の叙任となります。同じように直臣として与えられたということですね。ドラマではその時の口宣案も使っています。その時に豊臣の信繁という名を使っていますが、この頃武家の官位の叙任というのは全て秀吉がとりなして、秀吉はその際に全部豊臣姓でとりなしを行っているのです。その頃の武家はみんな豊臣姓ですね。真田というのは本来、滋野姓なのですが、この叙任に伴って姓を豊臣に改めるということになります。これは全ての武家がそうであって、家康も豊臣の家康、前田利家も豊臣の利家と、みんな豊臣なのですね。関ヶ原合戦後にまたもとに戻っていくという状況になります。

秀吉のもとでは先ほども触れましたように、所領1万9千石を領していたわけですが、信繁自体は秀吉の側近、馬廻衆なので伏見とか大坂にいるわけですね。その所領というのは父親の昌幸の領国の上田領から割き与えられたものですので、独自に所領を支配しているわけではありません。これも3通ほど信繁が所領支配に関する書状を残していて、それによってわかることなのですが、父親の昌幸の重臣に全て依存していて結局、年貢とかも現地で換金してもらってその換金したものを伏見に送ってもらうということを行っていたようです。1万9千石というと非常に大きな所領だと思いますし、江戸時代になると1万石以上は大名というのですが、この時代はそういう身分規定はありません。この時代の大名というのは基本的には国持クラスとか、あとは公家成という身分なのですね。先ほどの諸大夫というのは朝廷に参内はできるのですが、天皇に対面することはできないのです。天皇は建物の中にいますのでその建物に上がる身分を公家といいます。従五位下の侍従という官職に任官されて建物の上に上がって天皇と会う、それを公家といって武家の中でも公家となっている存在は、有力な武家になります。徳川もそうですし、前田、宇喜多、上杉、毛利など、外様の有力な武家と羽柴一門は公家になっていますが、秀吉の譜代は公家にはなっていません。三成でさえも従五位下治部少輔という諸大夫の身分です。大谷吉継も従五位下刑部少輔ということで諸大夫の身分なので、外様の有力な大名、あとは織田系の堀とか蒲生とか細川とかそういったところが公家で、それが大名とよばれています。その諸大夫の中で領国を持っている大名が、小名とよばれています。領国を持っていない者は単なる羽柴家の直臣です。1万9000石を信繁は持っているのですが、信繁自身が領国を持っているわけではなく、所領は父親の領国の中で与えられています。領国を持っているということは本拠の城を持っているということになりますが、信繁は本拠の城を持っていないので単なる領主、秀吉の直臣ということになります。ちなみにその知行1万石以上を大名というのは、江戸幕府になって三代目以降の状況になります。

文禄4年から慶長3年（1598）まで伏見城の普請役を昌幸と信之が共に負担しているのですが、こ

の伏見城の普請役に関する史料は真田家に一番残っていて、10通くらいあります。なぜか他の大名家にはそれほどまとまって史料は残っていません。ドラマでもこれを活かさない手はないということでなぜか昌幸が普請の責任者になっています。普請関係の史料は真田家に残っているのでそこを使いたいということで昌幸が責任者になったということになります。そういうように作劇をしているのですが、そのもとになるところに結構興味深い事実があるというのが今回のドラマ作りの特徴になると思います。

それから秀吉が死んで関ヶ原合戦になって、秀吉が死んだ後の権力闘争となります。これまでのドラマの通例は利家が死んだ翌日の閏3月4日の七将の襲撃事件がハイライトになっていたと思うのですが、今回はちょっとひねっています。その前の正月21日にスポットを当てて、これで1回分使っています。正月21日、何があったかは『「豊臣大名」真田一族』を読んでいただくとわかると思うのですが、秀吉死後の権力闘争の中で真田が出てくるのがその正月21日の事件です。七将襲撃事件はその後であります。やはりずっと見ていくと三谷さんは真田に関する事実というものを最大限活かしてドラマを作っているというようなことがわかると思います。

この関ヶ原のところの大谷吉継の描き方というのは秀逸ですね。前回の放送で病気になりはじめていることで描いてましたけれど、普通はハンセン病で描きます。近代になってから、明治の後半くらいにハンセン病という設定になってそれが近代になって増幅されていきます。江戸時代の前半は違います。合戦図屏風でも大谷吉継は頭巾をかぶってないです。ある段階でイメージされて近代になってさらに増幅されていきます。お茶に落ちたものを石田三成が飲んだという話がありますが、これは完全に作り話です。大正時代からで、その前のモデルは秀吉なのです。結局、小説の中で作られてきたイメージということになります。当時の史料では皮膚病以上のことはわかりません。また、吉継は目が見えなくなります。そういう皮膚病で目が見えなくなる症状を医学的に確認をした上で設定をしています。どういう格好になるのか私も見ていないのでわかりません。ただ、ハンセン病ではないということで描いていくこととなります。関ヶ原の時に石田三成と組んでがんばるわけですが、三成の描き方も今までと少し違ってきます。悩む三成を吉継が押しきるという感じで描いていくことになるので、ここは見物ではないかと思しますので注目してください。

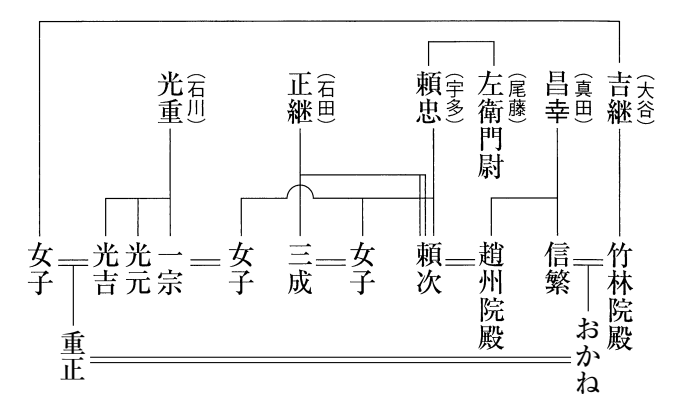


図5 「真田・石田・大谷関係系図」  
(拙著『「豊臣大名」真田一族』P57、2016年に加筆)

信繁ですが、信繁と大谷吉継はすでにご存知のように姻戚関係を結んでいる関係になります。なぜ信繁が大谷吉継の娘を妻に迎えたのかということに関してはきっちりと理解はされていなかったと思うのですが、今回調べていったところ、真田家というのは豊臣政権の中では石田・大谷派閥に属しているのです。資料(図5)を見ていただきますと、昌幸の娘が石田三成の義兄弟の妻になっています。古くからの秀吉の譜代に石川という一族がいるのですが、大谷



吉継の姉妹が石川光吉に嫁いでいて、その兄弟の一宗というのが石田三成と義兄弟の関係にあるという形で大谷吉継と石田三成は姻戚関係にあるのです。そういうような中で信繁が吉継の娘を妻に迎えたということになるのです。これも信繁が馬廻衆だったからこそ可能で、成立した婚姻です。単なる外様大名の子どもであれば吉継と姻戚関係を結ぶということはなかったと思います。この図自体は先ほどの『豊臣大名』真田一族』に入れているのですが、その後、信繁と竹林院殿の娘のおかねが、石川光吉の嫡男である重正の妻になっているということがわかって、それを追加しています。

慶長3年に秀吉が死去しますが、翌4年から羽柴家の当主は秀頼になって本拠は大坂に移ります。信繁は秀頼の馬廻にはなりませんので、単なる羽柴家の旗本になったということです。慶長4年の1月、秀吉の死後五大老・五奉行制が展開をしていくこととなりますが、その「大老」というのは江戸時代の用語ですので、これもドラマでは使えません。いわゆる大老ということで、「老衆」という当時の呼び方でいきます。ただし、字幕で説明することになります。大老というのは江戸時代の言葉で、当時は老というのが正しいのですが、学術的には大老という言葉が通用しているからです。家康以外の四大老・五奉行が徳川家康を糾問するということがあります。その時に徳川方の大名が伏見の徳川屋敷を警固するのです。その中に大谷吉継がいます。要するにこの段階の大谷吉継は徳川方なのです。その大谷吉継の姻戚関係にあった真田一族と石川一族もそれに従って徳川屋敷を警固するのです。ここが秀吉死去後の権力闘争の中で真田が出てくる場面ということになります。しかも大谷が徳川方になるのを三谷さんは上手に料理するのです。やがて大谷は石田と組んで対抗するのですが、それと齟齬ないように、かつ徳川に味方をさせる、ここは見物です。多分、1ヶ月後くらいだと思いますが、見ていただけたらと思います。

慶長5年の7月、父の昌幸とともに信之、信繁は会津討伐軍に参加をしていましたが、昌幸と信繁は徳川方から離叛をして、石田・大谷方につくこととなります。その後、第2次上田合戦ですけども、この時大坂屋敷にいた諸大名の妻子は大坂方、石田・大谷方によって人質にとられるのですが、信繁の妻の竹林院殿、昌幸の妻は大谷屋敷に保護されるということになります。姻戚関係をもとに彼らは大谷屋敷に保護されます。他の大名なんかは城内に収容されてしまいます。信之の奥さんの小松殿は昌幸が沼田城に入ろうとしているのを拒んだという逸話があると思うのですが、近世真田家に残っている逸話なので、そうとうはやい段階でつくられた逸話になります。当時の史料を見ていくと、この大谷が昌幸に対して合戦中に送っている手紙の中で、信之の妻も確保したので安心してくださいと書いてあるのです。そうすると、小松殿は実は大坂にいたのです。沼田城で父親を追い返したというのは完全な空想になります。

江戸時代人はイメージーションが豊富で、いろんな話を作っていくのです。われわれは実はそれにずっとのっかってきました。例えば戦後の歴史小説家は全部江戸時代のものを現代語で翻訳しているだけなのです。そのもとをたどっていくと全部江戸時代の軍記物とかの記録です。これを今われわれが1点1点、当時の史料にもとづいて点検していくと、これも違うこれも違うという話になります。こういった状況が今進められているということになります。大河ドラマも何十年という歴史があっても最初はそうした歴史小説を映像化するというでスタートしているのですが、今、「真田丸」で求められていることというのは、その後の研究成果を反映したドラマ作りになっています。

最新の研究成果をもとに作りたいということで、戦国時代のイメージも変わりました。2回目か3回目くらいで村人の武装というのが出てきたと思いますが、これも20年くらい前になってわかってきました。いつ村人は武装しなくなったのか。教科書的には秀吉の刀狩りや兵農分離政策といわれているのですが、私は兵農分離政策ではないと思っています。刀狩りも有名無実で、あれは村の割り当て制なので、武装は解除されていないのが事実です。江戸時代の末まで、村の有力者はみんな弓矢や鉄砲を持っていますから、その事実を説明できないのですね。実際にはみんな武器を持っているのです。それを使わなくなるのは17世紀の前半なので、今回はできるだけ武装をしてもらったり、村同士の争いというものを取り入れたりしています。プロデューサーが最新の研究成果を取り入れたいということで、12回のところで鉄火起請を行いました。村同士の争いで大名が裁判をするようになって、村の方はケンカするのか戦争をするのか裁判をするのかという選択をしていく状況が生まれるのですが、それを少し描いていることとなります。その後九度山時代になるとその話をさらに回収するというので一つエピソードを織り込んでいくのですが、2回目3回目の時はみんな百姓に二本差しをしてくれました。それは意識的に小道具さんが用意してくれたのですが、忙しくなると忘れてしまうのですね。民衆、百姓は武装していないというのが、戦後の時代劇ですりこまれてしまっているのも、みんな準備を忘れてしまいます。見た後に、こないだ二本差しになっていなかったですね、と言うと、忘れてしまうので次来た時言ってくださいと言われてました。今回、九度山のシーンで村人が出てくることになって、この間、念押しをしていたのですが、村の中では一本差し、村の外に出る時には二本差し、これをお願いしますと言ったら、わかりましたと言っていましたけれど、どうなるかわかりません。私もドキドキしながら見ているのですが、そういうことを少しでも発信していくことによって戦後の時代劇の固定観念を変えていく出発点になればいいと思っています。

関ヶ原合戦後ですが、昌幸は改易になります。ただし上田領は兄の信之が継承することになりまして、真田家の領国自体は維持されることとなります。ただし、上田城は徹底的な破壊をうけます。その状況がこの絵図に示されています(図6)。これは元和年間(1615~1624)ですから、真田が上田領から転封になる時に

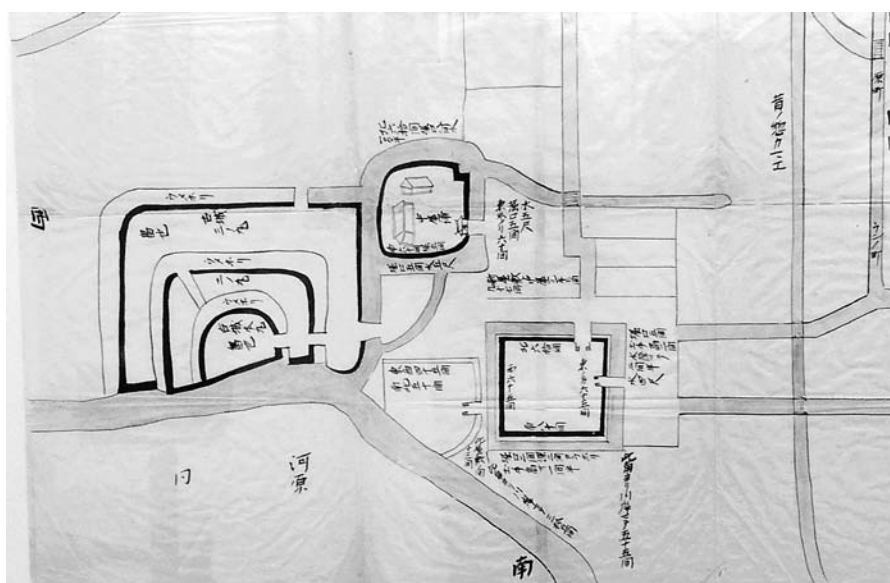


図6 「元和年間上田城絵図」

上田市立博物館蔵

作られた地図といわれています。この後、真田の後に仙石という大名が上田に入ってきました。今ある上田城というのは仙石氏が再建した城なのです。それまでの状況というのはどうなっていたか。本丸の周りには掘が掘ですね。二ノ丸があったのでその周りに掘があっ

て、三ノ丸があってその周りに堀があります。その堀にカタカナで横書きで「ウメホリ」と書いてあります。要するに、埋められてしまった堀ということです。発掘の成果ですと、建物の破片がその堀から出てくるのです。ということはどういうことかということ、建築物は全て堀の中に埋められて真っ平にされてしまったということです。土塁とかも全部壊されて、それをその後の仙石氏が再建したわけです。昌幸が退去した後の上田城というのは徳川方によって徹底的な破壊を受けています。城を使わなくなることを「破城」、あるいは「破却」というのですが、普通は大手門の隅石をとるとか、城のメンテナンスを行わないとか、象徴的な行為です。城は日常的にメンテナンスをしないと維持されず、自然に崩れていくので、そういう行為をすることでこれは城としては使わないということを示します。ですが、この時、徳川方が上田城を徹底的に破壊しているということは相当頭にきているということですね。ただし信之は上田領をまるまる引き継ぐことができました。この時に石高の換算が行われて、沼田領が3万石、上田領が6万5000石、合計9万5000石の大名になっています。

元和2年の4月に家康が死にます。その4ヶ月後の8月に信之が本拠を沼田城から上田城に移します。上田城といっても城はないのですが、屋敷を立ててそこに住むということです。家康が死ぬまでは信之は遠慮していたのでしょう。城はないのですが、真田の本拠は上田がふさわしいということで上田を本拠にするようになります。家康の死後、多分秀忠にお願いして許可を得たと思われます。それまで自分がいた沼田城には嫡男の信吉が入るということをしています。そういったことからすると信之上田への思い入れというのですかね、自分はずっと沼田の城主としていたわけですが、やはり真田を継いだからには真田の本拠は上田だというような思いを感じることができるのではないかと思います。

ただし、そうした信之でしたけれど、6年後、元和8年に信濃松代領13万石に転封されてしまいまして、上田領から離れることになります。それまでの本領であった上田領を手放すということになるのですが、その代わりとして石高が10万石を越えることになるわけです。この当時、10万石を越えた大名というのは有力大名です。将軍家からの扱いが違うのです。将軍家は将軍が変わる度に大名や領主に対して安堵状を出すのですが、10万石以上は花押なのです。10万石から下、5万石くらいは朱印、5万石から1万石くらいは黒印、1万石未満は直状ではなく家臣の文書です。花押を据えるということは一番丁寧な扱いです。これは10万石が基準になってくるのです。信之はここで10万石を越える石高を与えられ、それはそれだけ徳川政権、秀忠から尊重されていたということです。

信繁に話を移しますが、関ヶ原合戦の時、慶長5年12月に昌幸と信繁が徳川方に降伏をして開城することになります。そして29歳の時に九度山に隠棲します。九度山は高野山のふもとなので妻子とともに生活することができたということです。そこで嫡男の大助をはじめ、竹林院殿との間に4人の子どもが生まれることになります。生活は紀伊を支配していた大名浅野家、それから兄の信之らから支援を受けていたのですが、残されている史料は仕送りを要求するものばかりです。紀伊浅野家からは年間50石、今でいうと500万円くらいです。兄の信之からは臨時の仕送りが送られている史料があって、この金額は40両、400万くらいです。臨時で40両ということは正規の仕送りはもっと多いでしょうね。昌幸たちは1000万を超える生活をしていたのですが、それでもお金がないと言っているのです。何にお金を使っているかということ、交際費です。今はそういうのはなくなりましたが、大名

は、年始、上巳の節句、端午の節句などに贈り物をし合いました。そのために多額の借金をしていたらしいのです。信之に対しては臨時の仕送りを要求していて、それを借金返済にあてていたということです。借金生活だったということですね。信繁もいくつかこの時期の史料が残ってしまっていて、これも有名な史料ですが、兄の信之の家臣に対して焼酎を無心しているというものがあります。これがおもしろいのは、以前送ってもらったのは口の封がしっかりしていなかったので送られてきた時にはほとんどこぼれてしまっていたので、今回はこういうふうにして、ということを行っているのですね。それから、信之の宿老の木村綱茂と手紙のやりとりをしていて、木村からそんなに暇なら連歌でもしたらというふうに勧められていたのですが、それに対しては「老いの学問」で上達しないというようなことを嘆いている、そういう手紙が残っています。

それから姉婿の小山田茂誠、ドラマでは「しげまさ」で、どうも「しげのぶ」というのが正しいのではないかといわれていますが、この小山田に送った書状では、「もはや御目にかかることはないでしょう」「去年から急に年寄り、病身になってきた」「歯も抜け、髭も黒いところはあまり無くなった」というような状況を述べています。信繁にとってみれば、九度山での生活というのは相当きつかったのです。14年いるわけですから、人生の中で一番長い時間いたのが九度山なのですね。ここでは基本的にやることがないということですね。彼らは武家ですから、戦争するか政治をとることが仕事なのですが、全く仕事がない状態で14年間暮らしているということが彼らにとっていかに重い罰であったかということが改めてわかるかと思えます。隠棲生活というのは彼らにとってみれば社会からの排除だったということです。しかしその一方で、家族とか随行の家臣がいますので、随行の家臣は16人ですか、その家族もいますので、多分50人以上は養っていかななくてはならないということなのですね。昌幸が生きているまではそうした浅野家からとか兄の信之から送られてきたものも昌幸が死んだ後は削られていったと思えますので、やはり生活は苦しかったと思うのですね。

そういう中で慶長19年の10月、大坂方からの誘いがあって、当然それは受け入れてしまうでしょう。九度山を脱出して大坂城に入城することになります。この時、武装のための支度金なのですが、何百両だったか、10年分くらいの生活費が支度金としてどどーんと入ってくるのですね。これには当然なびくでしょうと私は思います。冬の陣では有名な「真田丸」といわれる砦の守備をするということで、そこで徳川方の攻撃を退けることになります。一旦、和睦が成立するのですが、翌年慶長20年、元和元年正月、大坂冬の陣終結後に、姉の村松殿、これは小山田の奥さんになりますけども、村松殿に送った書状で「大坂入城については奇怪と思われたことでしょう」「明日はどうなるかわからない情況だ」ということを述べています。信繁は大坂の陣でスーパースターになりますので、最期の頃の手紙だけは大事に残されたのですね。それ以前はほとんどわからないのですが、逆にこれだけ心情をつづった書状が残っているということ自体珍しいことになります。他の大名とか武将ではこういう内容のものはほとんど残っていない状況なのですが、信繁に関していうと、相当な有名人になりましたのであえて残されたということです。

4月に夏の陣開戦になりますけれど、その3月には兄の信之の代理で出陣していた嫡男の信吉に従軍してきた小山田茂誠に対して「定め無き浮き世なので一日先のことはわからない」というように述べていますが、実はこの頃から大坂方では再戦に暴走しているのですね。そういう状況の中で信繁は

籠城というか大坂方に留まるという判断をしているので、死んでしまうかもしれないということを考えていたということがわかります。

そして4月、夏の陣が勃発して5月7日の最後の決戦では南西部について天王寺方面の先陣を務めます。そこで激突するのが越前松平軍であるということですね。昨日、福井市立郷土歴史博物館で「大坂の陣と福井藩」の展示を見てきましたが、非常にいい展示ですね。実際にどういうことが伝えられているのかということがわかる資料がたくさん出ていて、私も大変勉強になりました。越前松平、これがドラマの最後にどこまで出てくるか、ということに私も非常に興味を持っているのですが、やはり忠直は出てきてほしいと思っています。越前松平軍が真田信繁を討ち取ったのですが、その状況も松平文庫の史料でわかるということですね。それ以外は細川忠興が手紙を書いている中で越前兵が討ち取ったと書かれているのですが、どういう状況で討ち取ったかというのは松平家の方に残されている記録から伺えます。それをもとに最期のラストシーンが作られると思うのですが、堺雅人さんなんかはもしかしたら戦争が始まって終わっちゃうのではないかという言い方もしています。三谷さんが何考えているかわからないので。意表をついたところがありますから。常識的に考えれば戦死をして終わり、最期は西尾仁左衛門に討ち取られるということになると思うのですが、どのようなシチュエーションで討ち取られるかということを私も楽しみにしています。

越前松平軍は、夏の陣で大坂方を討ち取った首の数が一番で軍功第一です。その軍功第一の忠直の家督は光長が継ぎます。実は忠直の後に福井に入った忠昌は別家なのです。光長が継いで、後に越後の高田にいた忠昌と入れ替えになるのです。ですから忠昌家というのは実は忠直家を継いでいるわけではないのです。秀康の子どもとして忠直家と忠昌家という二つの家があって、それが入れ替わっているのです。それで光長家というのは徳川綱吉の時に越後騒動で改易になるのですが、その時に御三家筆頭尾張の徳川光友が綱吉にこういって言います。越前家は御三家よりも大功があって、それを取り潰すというのは、これは御三家を取り潰すという論理になってしまう、と言うのです。その大功というのは大坂の陣です。やはり武家社会というのはどれだけ軍功をあげたかということでランクが決まるのです。大坂の陣は最後の戦争になりますので、そこで一番の成果を上げた越前家を潰すというのはおかしいだろうというのが当時の元禄時代の認識で、結局越後家はその後津山に復活されることになるのですが、それだけやっぱり越前家の軍功というのは徳川家にとってみれば大きいということになります。

それからドラマで出てくる「春」（竹林院殿）について、その後はどこまでわかっているかということですが、これも今回いろいろ調べた結果、こういったことがわかりました。大坂の陣の際には信繁とともに大坂城に入城しており、その時には嫡子大助、次男大八、次女から6女も一緒でした。そのうち、竹林院殿所生は大助、次男の大八、それから5女、6女ですね。大坂の陣後、竹林院殿は2人の娘を連れて、大坂を脱出して紀伊国に隠れていたところ、浅野家に捕縛されて徳川家に送られています。その後どうなったかという、これは確定しているわけではないのですが、徳川の家臣になっていた叔母婿の石川貞清（光吉）という人ですね。叔母というのは吉継の妹です。そこに扶養されたと考えられます。娘のおかねは貞清の嫡男である重正の妻になっているということがわかります。石川家はその後、尾張藩に仕えたいらしいのですが、そこに残されている石川系図にそのことが書かれ

ているということです。石川家の菩提寺は京都の竜安寺の塔頭大珠院というところにあるのですが、そこに信繁とともに竹林院殿の墓が建っていたということが伝えられています。

竹林院殿のことに触れたので、最後、ドラマの中ではヒロイン役の「きり」について触れておきたいと思います。実はわかっているのは高梨内記の娘ということと、信繁の3女と4女を生んだということだけなのです。いつ死んだのかもわかっていません。竹林院殿も死んだ日にちはわかってないです。江戸時代の中でというのはわかっていますが。ただ、真田家臣のいくつかの伝承を見ていくと、どうも、「きり」、これは役名ですけども、きりの父親の内記は信繁の乳母夫、守り役だったということが推測されます。ですから、その娘が信繁の側室になるということは順当になります。内記と采女<sup>うおめ</sup>父子は九度山に随行していたと思いますし、内記の娘も生きていたとすれば同様に随行したと思います。采女の方は信繁の嫡男大助の家老というように書かれていますので、二代続けて乳母夫、守り役を務めていた、そういう家なのです。大坂夏の陣の際、同様に大坂城に入城していたのですが、落城の際に三女の梅は伊達政宗の宿老の片倉重長に「乱取り」されています。これは戦場で拉致されたということです。その後、出自がわからず侍女として使っていたところが、ある日、信繁の娘ということがわかって、後妻に迎えたというように片倉家の記録に出ています。この時、竹林院殿は紀伊にいたのですが、高梨内記の娘の子どもたちは戦場で乱取りされているということなので、別々に行動しているということですね。内記の娘は娘を連れて別行動をとっていたのではないかと思います。

2月に上田で真田丸コンサートがあって、長澤まさみさんが出演し、私も出たのですが、その時に長澤さんといろいろお話をさせていただきました。あの人、背すごく高いんですね。私が173cm位なのですが、170cm 近くあるのではないですかね。だから普通ですと目線が下になるのですが、あの時は長澤さんがヒールを履いていたので私初めて見上げて女の人としゃべることをしました。非常にきれいな方で、楽しい時間を過ごさせていただきました。その後のスタジオなんかで、お声をかけていただきました。非常によい表情の演技をされているので、そういったところが非常におもしろいなあと思っています。よく「きり語」ということで現代語ではないかというような批判を受けるのですが、実は昔の時代劇を見ていると結構、現代語が入っているんですね。それはやはりその言い方というのですかね、時代劇口調というのが戦後の時代劇文化で作られたものなので、それにのっっていると、時代劇っぽくなるという単なる思い込みなのです。実は昔の20年前30年前の大河ドラマも現代語がたくさん入っていて、ほとんど近代用語です。今回はできるだけその近代用語を排除しているのですが、実はきりの言葉も語尾の「ね」とか「な」とかそういうのを取ると普通の言葉なのです。そういうイントネーションの問題とかで現代語というように感じると思うのですが、ただ、学生に聞くと、きりがしゃべっている言葉しかわからないというのですね。ですから、そういうところを狙ってこういう演出にしていたのかなと思っている次第です。時間を少し超過しましたが、私の話は終わりにしたいと思います。

〔付記〕本稿は2016年（平成28）7月30日に、福井県立図書館多目的ホールで行われた講演会「真田信繁と大谷吉継、そして越前松平家」の講演録を加筆・修正したものです。